様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月２０日現在

機関番号：32510
研究種目：基盤研究Ｃ
研究期間：2010～2012
課題番号：22520627
研究課題名（和文）　児童英語教育における教師―児童の談話分析と英語習得の総合的研究

研究課題名（英文）　A Study on Teacher-Student Interactions in Elementary School English Education

研究代表者
田中　真紀子（TANAKA MAKIKO）
神田外語大学・外国語学部・教授
研究者番号：40236633

研究成果の概要（和文）：
本研究の目標は、小学校英語教育における教師と児童の談話分析を通して、言語習得を促す発話の特徴を明らかにし、指導者養成・研修に役立つ指導マニュアルを作成することであった。研究の結果、小学校英語教員は、推論、関連付け、帰納法等の論理的思考手段や、日本語、ジェスチャー、指導文脈を利用し、児童の言語習得を援けていた。本研究の成果は小学校英語教員を対象とした指導マニュアルに反映され、研究協力校に配布された。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed to investigate the characteristics of teacher-student interactions that promoted children's language learning, and make an instruction manual based on our research findings and pedagogical implications. The result of the classroom discourse analysis between elementary school teachers (homeroom teachers [HRTs], assistant language teachers [ALTs], and Japanese teachers of English [JTEs]) and children was that elementary school teachers supported children's language learning by means of logical thinking such as analogy, association, reasoning, and deduction, and with recourse to Japanese, gesture, and teaching context. The insights and pedagogical implications were reflected in the instruction manual for elementary school English teachers, and the manual was distributed to the elementary schools that supported our research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	632,049	270,000	902,049
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	2,832,049	930,000	3,762,049

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：早期英語教育、談話と習得

１．研究開始当初の背景

文科省は平成20年に学習指導要領を改訂し、2011 年度より小学校５学年生から「外国語活動」を正式に導入することを決定した。それは各小学校間の教育内容の量的及び質的なばらつきを是正し、英語教育の機会均等や小中の連携を円滑に行うためであるが、そのばらつきは授業時間数等の他に次のものにも起因している。

(1) 教員の英語力・英語指導力：教師の資質は生徒に大きな影響(動機や成績等)を与える(Dörnyei, 2003；Schunk & Meece, 1992)。本プロジェクトの代表者である田中真紀子の研究(2008)では、教員が考える自己の英語運

用力や英語指導に対する自信・不安などが、授業の教員の発話に大きな影響を及ぼすことが教員に対する意識調査と談話分析で明らかとなった。本プロジェクトの代表者が関わった、科学研究費補助金『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』(基盤研究(B)課題番号16320075)及び『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』(基盤研究(B)課題番号19320085)(共に研究代表者:小林美代子)では、小学校教員たちの多くが自己の英語運用力には自信がなく大きな不安を抱いていることが分かったが、これらの教員の自己の英語力に対する意識は授業での発話に質的及び量的に大きな影響を及ぼしているのは大いに予想できる。質の高い指導者は、早期英語教育にとって非常に重要なことが先行研究でも分かっているように(Brewster et al., 2002;金森, 2003;バトラー 2005;大城 2005 等)、教師の「質」は教育の成否の大きな鍵を握っている。従って、その質の根幹となる教師の発話を研究することは大変意義深いことである。

(2) 教育の指導形態(単独授業かティームティーチングか、それとも日本人の支援が参加しての授業か等)や授業における日本語使用・英語使用に対する考え(「英語を使用することを原則とする」等):教師の発話(Teacher talk)は教師自身の任意のものではなく、各地域の行政や各小学校の教育方針(校長等の英語に対する考えなど)、さらにALT の採用(時間数等)等が大きく関連している(Green & Dixon, 2003)。従って、関係教育機関に対して英語教育に対する意識及び実態調査が必要になってくるが、そのような調査も現状では一切行われていない。

２．研究の目的

現在多くの小学校で英語教育が実質的に始まっている。しかし、現在行われている「英語／外国語活動」は実際どれくらい効果があるのか、ほとんど報告がない。本研究では教師(担任・外国語指導助手[ALT]、英語支援の教員)と児童の談話分析を通して、教師のどのような発話(特に教師の児童に対する指示や質問、フィードバック)が児童の「理解」や「習得」を促すかを探った。本研究は、子どもの言語習得の特徴と教師の「効果的な発話(Teacher talk)」を明らかにし、教授法への提言(理解可能なinput や習得に結びつくinteraction など)や、教材・指導マニュアルの作成などにおいて、2011年度より必修化される小学校英語教育に貢献することが目的であった。

３．研究の方法

本研究では、多面的手法(授業観察、アンケート、個別面談等)を用いて教師-児童の英語授業での談話分析を行い、発話の特徴を調査した。授業観察は代表者・分担者・連携研究者が担当し、ビデオの録画等は分担者及び、研究補助員(本学学部生)が実施した。アンケートの実施・個別面談等も代表者・分担者・連携研究者が行った。ビデオやインタビューで録画／録音した記録の書き起こしの作業は、代表者と分担者の指導・指示の下、研究補助員が行った。

各年度において研究代表者は分担者及び連携研究者と定期的に会議を設け、教師-児童の談話分析の研究を行う上での理論的枠組みを構築するため、言語習得理論・言語教育理論等の関連諸理論について、図書・学術論文等の文献を収集、理解を深めながら、研究活動を遂行した。

４．研究成果

本研究では、千葉県船橋市内の小学校での英語教育における教師と児童の談話分析を行い、教師がどのように児童の言語習得過程を支援しているかを調査した。以下では年次毎に研究活動とその成果の概略を述べる。

2010 年度は、教師と児童の談話分析に関する文献収集・文献研究を行うとともに、本学児童英語教員養成課程の教育実習先の小学校で録画した授業観察記録の談話分析を行い、その結果と教育的示唆を、2011 年 2 月に神田外語学院で行った第 1 回小学校英語教育ワークショップ・講演会で報告した(学会発表 17)。また、同年に、船橋市教育委員会管轄下の小学校 2 校(W 校・N 校)の協力を得て、2011 年 1 月下旬から 3 月上旬にかけて授業観察を行い、インタビューも実施した。

2011 年度は、前年度の小学校英語教育ワークショップ・講演会での発表内容を洗練させて Pan-SIG 2011(第 10 回全国語学教育学会分野別研究会)で発表する(学会発表 13)とともに、学生から研究補助員(授業観察記録やインタビューの書き起こし業務担当)を募り、2010 年度に収集した小学校 2 校での授業観察記録、及びインタビューデータの質的分析を行った。その成果は、JALT 2011(全国語学教育学会国際年次大会)で発表した(学会発表 14)。以下では、その内容の概要(Honda, Tanaka,& Osada, 2011)を述べる。Honda, Tanaka, & Osada (2011)では、船橋市内の小学校 2 校での第 5 学年の小学校英語活動の授業観察記録計 12 時間分の授業の書き起こしデータを、Vygotsky (1978)の社会文化理論の枠組みに基づき、教師が児童の発話や理解を促すのに、どのようなサポートをしていたかを調査した。その結果、推論・関連性・帰納的思考・理由付けといった論理的思考に働きかけながら、児童の言語習得過程をサポートしていることが分かった。以下にそれぞれの具体例を示す(以下に示す略語の内、JHT

は中学校教員、JC は日本人英語指導員を示す)。

【推論の例】 2011 年 1 月 31 日､於 W 小学校、第 5 学年

(概要) 野球のベースの言い方から日付の言い方を導く。

JHT: So, what’s the date today? (points to the date “January 31st” on the blackboard)
Ss: January thirty-one.
S1: Thirty-one!
S2: Thirty-one?
－－－－－－－－ (中略) －－－－－－－－－－
JHT: Yes, “ice cream day”. But, “thirty-one” は、一の時は、野球の、ほら、ベースで。
S3: First.
JHT: First. そうだね。“Thirty-first” だよ、“Thirty-first”。
Ss: Thirty-first.

【関連性の例】 2011 年 2 月 7 日､於 W 小学校、第 5 学年

(概要) クラブ活動の例を挙げながら、“Do you know other clubs?” と尋ね、さらに他のクラブ活動の言い方を引き出す。

JHT: Ah, so, tennis club, Judo club, do you know other clubs?
S1: Soccer.
S2: Soccer club.
ALT: Ah, yeah, soccer.
JHT: Anything else?
ALT: Please raise your hand. Yes. (Nominates a student)
S3: Volleyball.
JHT: Volleyball, ah, volleyball. Very good.

【帰納的思考の例】2011 年 2 月 4 日、於 N 小学校、第 5 学年

(概要) 朝起きてからすることの絵カードから、“Morning routines.” の意味を帰納的に引き出す。

HRT: はい。 Today’s lesson is “Morning routines.”
ALT: Yeah.
JC: 何でしょう？ Morning routines.
ALT: What’s “Morning routines”？
S1: 朝起きて。
ALT: Morning.
JC: 朝起きて？
ALT: Routine (points to a picture card), routine (points to a picture card), routine (points to a picture card), routine (points to a picture card), routine (points to a picture card).
S2: 朝起きてからやること。
JC: そう、そう。朝起きてやることね。習慣のこと。

【理由付けの例】 2011 年 2 月 4 日､於 N 小学校、第 5 学年

(概要) S2 の発話 (I’m hot.) に対し、理由を推測しながら、JHT が発話を展開する。

JHT: How are you? (Asks a student)
S1: I’m Hungry.
JHT: You are hungry. How are you? (Asks another student)
S2: I’m hot.
JHT: You are hot. Ah, you are very near to the stove.

上に示した例の内、推論・関連性・帰納的思考に働きかけたサポートの例においては、児童の理解を促したり、発話を引き出したりする役割を果たしている。理由付けの例は、児童の理解を促したり、発話を引き出したりしている例ではないが、児童の“I’m hot.”という発話に対して、教師がその理由を考えて、さらなる発話を展開していると考えられる例である。このような例は、教師が児童とのやりとりをすぐに終えてしまうのではなく、相手の気持ちを考えながら聞くという姿勢を養う上で手がかり・機会を与えうる。以上の分析結果に基づき、Honda, Tanaka,& Osada (2011)は、文部科学省が 2011 年に発行した『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて』において言語活動を充実させる上で思考力の育成に重点が置かれていることに言及し、言語能力のみならず、思考能力をも発達させる上で教師と児童の社会的相互交渉が重要であるという本研究の教育的示唆が、文部科学省の指導方針とも整合していることを述べた。

2012 年度は、2008 年度から 2011 年度に教育実習に参加した学生のビデオによる授業観察記録を書き起こし、担任教師のサポートに焦点を当てて、担任教師が児童の言語習得過程を具体的にどのようにサポートしているかを調査した。理論的枠組みと研究手法は、Honda, Tanaka, & Osada (2011)に準じている。分析の対象となったのは、千葉県船橋市内の小学校 19 校で、英語活動の授業計 36 時間 36 分のビデオを書き起こし (学年は 1～6 年生まで多様である)、教師ー児童の談話を分析した。その結果、担任教師は、児童がつまずきや誤りを示した際、ジェスチャー・日本語・指導文脈を利用して、児童の理解を促したり、発話を引き出したりしていたことが分かった。以下にその具体例を示す。

【ジェスチャー】2010年6月28日、於W小学校、第4学年

（概要）児童（S[T]）がALTの発話“Nose”が体のどこの部位か分からず、担任教師に日本語で「鼻？」と尋ねるが、担任教師は自分の鼻を触りながら英語で“Nose.”と繰り返し、児童の理解を促す。

ALT: Nose.
Ss: Nose.
S[M]/S7:（自分の鼻を触る）
S[T]:（迷いながら、HRTを見て）鼻？
HRT: Nose.（ジェスチャー：うなずき、自分の鼻を指す）
S[T]:（自分の鼻を指す）

【日本語】2010年6月9日、於M小学校、第3学年

（概要）“day”と“date”の言い方・理解を確認する場面で、担任教師は日本語で“day”と“date”の区別を確かめる質問をしている。

ALT: Yes, very good. Date. ●●●. OK.
（黒板に“Day”と板書する）
What is the day and date?
（黒板に“Date”と板書する）
KUIS: 覚えてる？
S1: 何だっけ？
ALT: Day.
Ss: Days.
HRT: “Day”ってどっち聞くとき言うんだっけ？
ALT: （曜日のカードを指しながら）Day, it is “day”.
KUIS: 英語でいいよ。あ、英語じゃない、日本語でいいよ。
S: 日本語。
KUIS: “Day”、“Day”って、
（曜日のカードを指す）
ALT/JC: Day.
ALT: In Japanese, “Day”？
Ss: 曜日。
ALT: Yes. ●●● this day. And “Date”？
HRT: “Da, Date”は？
ALT: Date. Da-te.
HRT: 「何、日」。ね？
ALT: OK?
KUIS: OK?
ALT: OK, stand up, please

【指導文脈】2010年6月9日、於M小学校、第3学年

（概要）“angry”の意味を日本語で確認する場面で沈黙する児童に対して、いたずらし合う児童への注意を通して意味を確認しようとしている。

ALT: What is “Angry” in Japanese?
Ss: （沈黙）
S1/S2: （一番前に座っている児童二名が、いたずらし合っている）
HRT: そこの二人、先生が“Angry”になるよ。
KUIS: （笑う）
S1/S2: （児童二名はいたずらをやめる）
ALT: （絵カードで顔を隠しながら笑う）
KUIS: 日本語で？
ALT: What is “Angry” in Japanese?
KUIS: どういう意味？
Ss: 「怒っている」

上で示した例は、児童を日頃から観察し、児童が何を考えているかを把握している担任教師が、児童のつまずきや誤り、そして、理解・発話上、困難が生じうることを予測して行うことができるサポートであると言える。このような事例に基づき、担任教師が児童の言語習得をサポートする際、児童がつまずいていないか、疑問を抱いていないかを注意深く観察する（observe）段階、その観察から児童の理解・発話上の困難に気が付く（notice）段階、そして、実際にことばやジェスチャー、指導文脈等を利用してサポートする（support）段階という、少なくとも、3つの段階が関与していることを示した。さらに、これらの過程における教師と児童の社会的相互交渉は言語習得を促す上で有益であると議論した。

以上の3年間の研究成果は、指導マニュアル『小学校モデルトーク集』に反映されている（図書 1）。当該の指導マニュアルは、12章計123ページから成り、挨拶、身の回りの物や買い物等のトピック・テーマ毎に児童への発問や声かけと期待される応答の引き取り方を具体的なモデルトークとして例示している。いずれにおいても、教師が一方的に児童に新出表現を導入するのではなく、発問やジェスチャーを伴う声かけなどを通して、児童の思考に働きかけながら言語を学ぶ事が出来るように配慮がなされている。

以上では3年間の研究プロジェクトの成果の概略を述べてきたが、談話分析に基づく研究成果に基づいて指導マニュアルを発行し、研究協力校への配布を通じて社会還元したことが最も重要な成果であったと言えるだろう。今後は、指導者養成や研修の場を通じてフィードバックを得ることにより、指導マニュアルの効果的な活用法を考えるとともに、改善を加えることにより、さらに実践現場に即したものとして発展させることができると考えられる。本研究プロジェクトが終了した後も、そのような活動に労を惜しまず従事していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

1. Osada, E., and Tanaka, M. (In Press). Exploring Taiwanese primary English education. JALT Conference Proceedings — JALT 2012. （有）
2. 田中 真紀子・本多 正敏・長田 恵理・西 尚子.（2013）「児童英語教員養成課程履修者の教師認知の考察から得られる指導者養成プログラム改善への示唆」『関東甲信越英語教育学会誌 第27巻』, 85-98.（有）
3. Tanaka, M., and Park, S. (2012). Parents' beliefs and children's code-switching. Studies in Linguistics and Language Teaching 23, 183-209. Research Institute of Language Studies and Language Education, Kanda University of International Studies. （無）
4. Tanaka, M., Allen, R., Rose, G., and Kandhasamy, J. (2010). A study of code-switching in an international elementary school. Studies in Linguistics and Language Teaching 21, 167-193. Research Institute of Language Studies and Language Education, Kanda University of International Studies. （無）

〔学会等発表〕（計１８件）

1. Osada, E. and Tanaka, M. (2012). Exploring Taiwanese primary English education. Paper presented at the 38th JALT (The Japan Association for Language Teaching) Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo (October 2012, Shizuoka, Japan). （有）
2. Tanaka, M. and Park, S. (2012). Parents' beliefs and children's code-switching. Paper presented at the 38th JALT (The Japan Association for Language Teaching) Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo (October 2012, Shizuoka, Japan). （有）
3. 田中真紀子(2012)「児童英語教員養成課程』海外実習における学生たちの教育に対する意識の変化～ポートフォリオの分析から～（講演）」平成23年度神田外語大学CTEC主催第3回小学校英語教育ワークショップ&講演会「指導者養成・研修の取り組みから見える成果と課題」. （9月8日於千葉）
4. 田中真紀子（2012）「小学校英語教育の展開」平成22 年度神田外語大学教員免許状更新講習. （8月27日於千葉）
5. 田中真紀子・Edward Sanchez(2012)「文字と発音の指導」平成23年度神田外語大学CTEC 主催第3回小学校英語教育ワークショップ&講演会「指導者養成・研修の取り組みから見える成果と課題」. （9月8日於 千葉）
6. Shawn Hupka・本多正敏(2012)「児童の理解と発話を促す発問の作り方と活用法」平成23年度神田外語大学CTEC主催第3回小学校英語教育ワークショップ&講演会「指導者養成・研修の取り組みから見える成果と課題」. （9月8日於 千葉）
7. Honda, M., Tanaka, M., and Osada, E. (2012). How HRTs scaffold children's language learning. Paper presented at the 38th JALT (The Japan Association for Language Teaching) Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo (October 2012, Shizuoka, Japan). （有）
8. 田中真紀子・本多正敏・長田恵理・西尚子(2012)「児童英語教員養成課程履修者の教師認知の考察から得られる指導者養成プログラム改善への示唆」関東甲信越英語教育学会第36回群馬研究大会. （8月19日於 群馬）（有）
9. Tanaka, M. and Park, S. (2011). Changes in the nature of children's code-switching. Paper presented at the 37th JALT (The Japan Association for Language Teaching) Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo (October 2011, Tokyo, Japan). （有）
10. Tanaka, M. and Sanchez, E. (2011) Teacher-student discourse analysis and language policy: JHT teachers scaffold elementary school students' learning more accurately than HRTs using students' ZPD. Paper presented at the 2011 American Association for Applied Linguistics (AAAL) conference. (March 2011, Boston) （有）
11. 田中真紀子（2011)「小学校英語教育の展開」平成22年度神田外語大学教員免許状更新講習. （8月26日於 千葉）
12. Tanaka, M. (2011) Elementary school English education in Japan: Past, Present, and Future (Invited plenary talk). Nakasendo English Conference

2011 (June 19, 2011, Tokyo).
13. 田中真紀子(2011)「小学校英語教育における文字指導について（講演）」平成23年度神田外語大学CTEC 主催第2 回小学校英語教育ワークショップ&講演会「教材開発と指導技術」(12 月10 日於千葉)
14. 長田恵理・本多正敏・田中真紀子(2011)「英語活動における教師の発問―学習者の応答と教師のサポート―」第10 回全国語学教育学会分野別研究会 (Pan-SIG)．（5月21日於 長野）（有）
15. Honda, M., Tanaka, M., Osada, E. (2011) How teachers scaffold children's English learning. Paper presented at the 37th JALT (The Japan Association for Language Teaching) Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo (October 2011, Tokyo, Japan).（有）
16. 田中真紀子(2010)「小学校英語教育の現状と課題：現場教員が抱えている問題とのその解消法としての教員研修のあり方（招聘講演）」千葉カリキュラム学会第21 回大会．（8月28日於 千葉）
17. 田中真紀子(2010)「理論に裏づけされたコミュニケーション活動の紹介（ワークショップ）」平成22年度神田外語大学CTEC 主催第1回小学校英語教育ワークショップ&講演会「効果的な小学校英語教育」．（2011年2月11日於 東京）
18. 田中真紀子・長田恵理・本多正敏(2010)「教師―児童の談話の特徴と教育的示唆(講演)」平成22年度神田外語大学CTEC 主催第1 回小学校英語教育ワークショップ&講演会「効果的な小学校英語教育」.（2011年2月11日於 東京）

〔図書〕（計３件）
1. 田中真紀子（編著）、本多正敏・長田恵理・Edward Sanchez （著）『小学校英語モデルトーク集』株式会社みつわ：千葉.
2. 田中真紀子（編）、本多正敏（著）『神田外語大学児童英語教育研究センター活動概要報告書』株式会社みつわ：千葉.
3. 田中真紀子（2011）「小学校英語教育の展開（第6章）」『現場で役立つ教育の最新事情』北樹出版：東京.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
(1)神田外語大学児童英語教育研究センター（CTEC）主催第 1 回小学校英語教育シンポジウム
[URL]
http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/kuis_news/detail/0515_0000000771.html

(2)神田外語大学児童英語教育研究センター（CTEC）主催第 2 回小学校英語教育ワークショップ・講演会
[URL]
http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/kuis_news/detail/0515_0000000772.html

(3)神田外語大学児童英語教育研究センター（CTEC）主催第 3 回小学校英語教育ワークショップ・講演会
[URL]
http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/kuis_news/detail/0515_0000000801.html

６．研究組織
(1)研究代表者
田中 真紀子（神田外語大学・外国語学部）

研究者番号：40236633

(2)研究分担者
本多 正敏（神田外語大学・児童英語教育研究センター）

研究者番号：20554827

(3)連携研究者
長田 恵理（神田外語大学・児童英語教育研究センター）

研究者番号：40581690